

美德を引き出すアプローチを導入した両親学級の介入効果

Effectiveness of Virtues approach for parenting class

浦山晶美* 金川克子** 松井弘美***

Akimi Urayama, Katsuko Kanagawa, Hiromi Matsui

要旨

子育ての質は次世代へと伝達されやすいことから、妊娠中から心理的なサポートが重要である。「健やか親子21」では育児不安や育児ストレスは子どもを虐待するリスクをはらんでいることから母親の心の問題に取り組み、多様な子育て支援がなされている。しかし、虐待の数は増加する一方である。そこで本研究は、子育て支援の取り組みの一環として心理的なサポートに着目し、Virtues projectの方法を取り入れた美德を引き出す両親学級を編成し実践した。そして、その学級の効果を自尊感情尺度、特性的自己効力感尺度、および参加後の感想文をもって判定した。結果は学級受講前よりも受講後の方が自尊感情・特性的自己効力感の尺度得点が有意に高くなった。また、感想文は質的記述的に分析し、4つのカテゴリーと17つのサブカテゴリーが抽出された。その内容は、美德の言葉が心に響いて【美德を育児に取り入れることの価値観の芽生え】と【親としての育児感が芽生え】、グループワークに参加することにより他者と伴に【人との交流の喜び】を共有し、受け身ではなく積極的に学級に参加でき【有意義な時間の享受】をすることができた等であった。研究結果から、美德を引き出すアプローチは自尊感情・特性的自己効力感を高め、さらに親になる意識を深め、子育て支援として価値があることが示唆された。

キーワード：両親学級、自尊感情、特性的自己効力感、美德

序論

「健やか親子21」は、21世紀の母子保健の主要な取り組みを提示するビジョンとして関係機関・団体が一体となって推進する国民運動計画として、2001年から10年間に渡り計画実施されてきた。しかし、課題目標が十分に達しきれなかったため2014年まで延長された。

「健やか親子21」における子育て支援の基本理念は豊かな人生が送れるように個々の親子を支援することにある。主要課題の1つとして「子どもの心の安らかな発達の促進と子育ての不安の軽減」を掲げ、子育て不安やストレスの延長線上にあると考えられる虐待への対策を柱としている。具体的には、母親が子育てを楽しみ、子どもに愛情を注ぐことができるようにする行動計画が練られている¹⁾。また、2000年に「児童虐待の防止等に関する法律」が成

立し、これにより、児童虐待の防止等に関する施策が促進され、児童に対する虐待の禁止、児童虐待の防止に関する国、地方公共団体の責務、児童虐待を受けた児童の保護者のための措置等が規定された。しかし、厚生労働省の2006年の調査によると、児童相談所に寄せられた虐待の相談対応件数は3万7千件で、これは統計を取り始めた1990年と比べ34倍に増加している²⁾。主たる虐待者の62%が実母で、次に実父22%であり、8割強が実の両親であった。多様な子育て支援の取り組みが実施されているが子どもへの虐待は増加する一方である。

育児困難や不適切な養育態度、また虐待は、養育者の自尊感情の低さや育児ストレスの高さからもたらされる認知の歪み(被害的認知)が先行要因となることが分かってきた³⁾。養育者から不適切な養育をうけて育った子どもは自尊感情が低い傾向になり

*山口県立大学看護栄養学科

**元神戸市立看護大学学長

***富山大学大学院医学部看護学科

やすいことも指摘されている⁴⁾。それらに加え、夫婦関係が母親の育児態度に影響を及ぼすこと⁵⁾、そして自己効力感が高いことが育児ストレスや育児不安を軽減させていることが分かってきた⁶⁾。また、子どもの1歳半までは人格形成の基礎が作られる時期と考えられており、子育ての質や内容は次世代に伝達されやすい⁷⁾。このような現象の中で、どのように子どもと接したらよいかわからないという母親が増加している⁸⁾。以上のことを考え合わせると、健全な子育てのために妊娠中からなるべく早期に養育者の心理的サポートを行うことが重要である。そこで本研究は、子育て支援の取り組みの一環として、Virtues project（以後VPと略す）の方法を取り入れた両親学級を編成・実践し、その効果を自尊感情尺度、特性的自己効力感尺度、参加後の感想をもって判定した。

ここでVPについて説明する。VPは国連の「国際家族年」の会議（1995年）で、最優秀モデル・プログラムとして選出され、現在、90か国で紹介されている⁹⁾。このプログラムは1991年にLinda Kavelin-Popov（臨床心理士）Dr. Dan Popov（小児精神心理学者）、John Kavelin（元Disneyland director）によって、全世界のあらゆる聖典をもとにして構成された¹⁰⁾。3人は聖典を研究し、「人間

の美德とは何か—それは単純な叡智に基づいたもので、文化や価値観を超えたものである」という共通点を見出した。そして、彼らは研究を進めていく中で、人間の精神的な人格を表す言葉が360個程度あることがわかった。その中から、一般的な家庭、子どもの人格の発達、自尊心の形成の助けになる言葉として「真摯」「責任」「愛」等52個の美德の言葉に絞った（図1）。VPの目的は、人間の道徳的な視点を取り戻し人間的な資質の発達を支援し、美德に基づいた人間関係を築いていくことにある。そして、目的に沿ってワークショップを積んでいくことによって、人間関係、自尊感情、美德の視点を培うこと等が期待できると考えられている。とくに子育て中にある養育者には、忍耐・寛容・優しさ・ゆるし等を発揮しなければならない場面が多い。それらのことが具体的に実践できる方法があれば、母親の心理的なストレスも軽減される。そこで本研究では、このVPの原理と実践方法を妊娠に関する保健指導の内容と共に両親学級の中に取り入れて構成・実践しその効果を測定した。なお、本研究において、VPの理念、原理や実践方法を対象に応じて一部取り入れて実践することをVirtues Approach（以後VAと略す）という。

愛	識別	誠実	名誉	共感	親切	忠誠心	ゆるし
いたわり	自制心	辛抱強さ	優しさ	協力	信頼	慎み	喜び
思いやり	自信	整理整頓	やすらぎ	勤勉	信頼性	手伝い	理解
感謝	柔軟性	責任	目的意識	決意	正義	忍耐	理想主義
寛大	正直	節度	勇気	謙虚	清潔	奉仕	和
寛容	情熱	創造性	友好	優秀	自己主張	無執着	礼儀
気転	真摯	尊敬	コミットメント				

図1. 52のvirtues（美德）

（注）価値観は文化によって変わるがこれらの言葉は特定の宗教やイデオロギーに偏っておらず、人間の資質の要素である（Linda Kavelin Popovが提唱した52の美德）

研究方法

1. 研究デザイン

介入研究で、妊娠中の保健指導にVAを追加した両親学級を実施する。

2. 研究対象者と調査期間

研究依頼施設で健診を受けている妊婦を対象に、調査を2007年7月から2008年7月まで実施した。

3. VAを学級に取り入れるための準備

研究者は、学級にVAを取り入れるためにVPが規定している所定の研修を受け、国際公認ファシリテーターの資格を得た。

4. 学級構成の内容

学級の内容は妊婦保健指導とVAのシェアリングサークル(Sharing Circle:以後SCと略す)を導入し全過程に休憩を入れて90分程度とした。効果的な学級運営のため1回の参加定員は10名程度とした。

〈SCについて〉

SCは人間の資質といわれている美德の言葉を用いて、相手の長所を伝える、もしくは承認するというワークである。VPの考え方として、言葉には人の心を動かす力があり、使い方によっては人の心を打ち砕くこともあれば、能力を引き出すことができ、また、心の癒しにもつながるという理論を基本としている。SCの具体的方法は以下に記す。

一般の保健指導を約40分間実施した後、VPの概略と基本原理を説明した。次に参加者は2～3人のグループになり、各自Virtues(美德)cards¹¹⁾から1枚を引いて、それをじっくり読む。このカードは52枚あり、1枚のカードには1つの美德の、“定義”“実践理由”“実践方法”“確言”が書かれている。参加者は自分が引いたカードに書かれていた内容と最近の出来事に関連づけて話す。開放感をもって自己のことを話す場合、その場が安心・安全・信頼できる場となるような工夫が必要である。本研究では、52ある美德の言葉から、「尊敬」「礼儀」「信頼」「自己主張」を選択し境界線をつくり、それに基づいたルールを設定した。これを、参加者に「礼儀:お互いに他の人からしてもらいたいように他の人にもそのように接します。尊敬:お互いの話をよく聞きます。一心に集中し、他の人の話をさえぎったり忠告したり、比較しません。信頼:私たちの間で分け合った全ての個人的な情報を、個人的なものとして尊重して他に洩らしません。自己主張:私にとって、正

しいと思ったことを言います。そして、居心地のよいような方法で参加します。」と説明する。このようなルールを練習した後、実践に入った。参加者は自分が引いた美德のカードから、その意味や具体的な実践方法を理解し、次にカードの内容と最近の出来事に関連づけて自分のことを話す。グループでの話し合いの後、お互いに相手のもつ美德を発見し、それを言葉で承認することにより隠れていた美德を引き出し、お互いのネームプレートに承認した美德の言葉を書く。参加者はカードに書かれた美德の視点から自分の状況を捉え直し、または今後の考え方のヒントを得る。このように会話の中に美德の認識を取り入れ自由に感情を述べることによりグループ内で共感を呼び起こし、それが友達作りに発展していく可能性を作り出す。

6. データの収集方法

学級参加者に、1回目(初回時のみ)の両親学級受講前と受講後に調査票に記入してもらった。また、感想文は参加後に記載してもらった。

7. 調査項目

調査票の内容は、年齢、初・経産婦別、結婚後年数、妊娠週数である。使用した尺度は、自尊感情¹²⁾、特性的自己効力感¹³⁾および、学級参加後の感想文である。それぞれの尺度は主成分分析、構成概念の因子的妥当性および信頼性は確認されている。

8. 分析方法

学級受講前後の尺度得点差をWilcoxonの符号付き順位検定を行い、有意水準は5%未満とした。感想文等の自由記述は参加後の思いの記述を分析するために質的記述的分析法を採用した。質的記述的分析においては、データを繰り返し読み、特に変化する美德への思いや気づきに関する箇所について、その意味内容を損なわないようにコード化した。類似するコードをサブカテゴリー(以下〔 〕で示す)としてまとめ、さらに、サブカテゴリー間の類似性によって集約化しカテゴリー(以下【 】で示す)を生成した。分析の過程では常にデータとの比較を行い、データに忠実なカテゴリー名となるように分析をした。これらの分析過程において看護専門家の研究者間で討議を繰り返し行った。

9. 倫理的配慮

本研究は石川県立看護大学の倫理審査委員会の承認を得た。次に研究依頼施設長の署名による同意を得た。協力者には参加は自由であり、また、途中で取りやめ

ることができることを口頭と紙面で説明した。

結果

1. 対象の背景

対象者の背景・属性は表1に示した。調査期間中に初回の学級参加時に調査票を119人に手渡し、回収率は100%であり、有効回答は108人（有効回答率90.8%）であった。以後、有効回答について述べる。妊婦の参加者は76人、平均年齢は29.9歳で、その内訳は初産婦が87人（80.6%）、経産婦21人（19.4%）であった。父親の参加者は32人、平均年齢は30.1歳であった。妊婦の学級参加時の平均妊娠週数は30週で、平均結婚年数は約2年であった。

2. 学級参加前後における2つの尺度得点の差の結果

		平均値 (SD)
年齢 (歳)	妊婦 (n=76)	29.9(4.3)
	夫 (n=32)	30.1(3.6)
結婚後年数 (年)		2.2(2.1)
参加時の妊婦の妊娠週数(週)		30(5.4)
		人 (%)
初産婦		87(80.6)
経産婦		21(19.4)

学級参加前後における自尊感情・自己効力感の尺度得点の差については表2に示した。自尊感情の平均尺度得点は、参加前が26.2 ± 4.9点、参加後は27.3 ± 4.7点で前後において有意差 (p<0.001) が見られた。特性的自己効力感の平均尺度得点は、参加前が72.3 ± 12.2点、参加後は75.2 ± 13.1点で前後において有意差 (p<0.000) が見られた。

表2. 自尊感情・自己効力感の尺度得点

「学級出席前・後」の比較¹⁾ (n=108)

		M	SD	Min	Max	p ¹⁾
自尊感情	前	26.2	4.9	13	40	**
	後	27.3	4.7	14	40	(.001)
<hr/>						
特性的自己効力感	前	72.3	12.2	40	105	**
	後	75.2	13.1	42	109	(.000)

Wilcoxon の符号付き順位検定 * P<0.05; ** P<0.01
M:平均値, SD:標準偏差値, Min:最小値, Max:最大値

3. 学級参加後の感想

分析の結果、4つのカテゴリーと17つのサブカテゴリーが抽出された（表3）。【親としての育児感が芽生え】は、VAの学級に参加することによって、親としての役割や自己の心理的な事を考え、近い将来の心構えをする機会となり〔親になるという意識が芽生えた〕、同時に親になるこころの準備とともに、〔育児への思いが高まり〕〔夫婦で頑張ろうと思った〕という意識が高まってきた。【人との交流の喜び】は、SCより他の妊婦と話してリラックスでき貴重な時間を過ごすことができたことから〔人と交流して楽しかった〕〔グループワークは良かった〕〔仲間ができて良かった〕〔同じ状況の人と出会えて安心感が生まれた〕〔参加者と話ができ良かった〕という学級に対するポジティブな印象をもった。そして今後も話す機会があれば良いと思うことから〔もっと話す機会が欲しい〕と感じ、美德の話の効果を実感し、他の人にも聞いてほしいと思うことから〔子どもと関わる人には聞いて欲しい〕と感じていた。【有意義な時間の享受】は、SCを体験することにより実のある時間を共有できたと感じ〔とても楽しかった〕、今までの受身の学級ではなく〔積極的に参加できた〕〔充実した時間だった〕という参加型の学級の効果を体験していた。【美德を育児に取り入れることの価値観の芽生え】は、美德の言葉を使う練習やグループワークにより〔美德の話は心に響いた〕、美德は子どもが生まれる前からも使い自分が実践できるようにしておき〔育児・家庭での実践に結び付けたい〕、自己のコミュニケーションを振りかえる必要性を感じて〔美德の考え方の大切さを実感した〕〔自分を見つめなおした〕という新しい価値観が芽生えていた。

表3. 参加後の感想

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
有意義な時間の享受	楽しかった	・楽しかった。・とてもおもしろかった。・とても実のある時間だった
	積極的に参加できた	・受け身の授業でなく積極的に参加できた。
	充実した時間だった	・今まで受けた内容に比べ充実していた。・有意義な時間だった。
	不安が和らいだ	・不安が改善された。・不安に思っていることが分かりやすく教えてもらった。・出産育児に対して不安が少し和らいだ。・出席できて良かった。
人との交流の喜び	子どもと関わる人には聞いてほしい	・できるだけ父親に参加を勧めてほしい。・初産婦の人には聞いてほしい。・是非皆さん美德の話聞いてほしい。・祖父母に子供に対してどうあるべきかを知ってもらいたい。・赤ちゃんのことを思うのなら出席した方がよい。・親の役割と美德の話を他の人に聞いてもらいたい。
	グループワークは良かった	・グループワークで討議したり何かすることはためになった。・経験できることは大切だ。
	仲間ができた	・この教室でなければ同じ境遇の人との出会いもなかった。・妊婦仲間の出会いがうれしい。・友達が出来た。・妊婦さん皆、友達だと思った。
	もっと多くの話す機会が欲しい	・出産育児を通じていろんな場に積極的に出かけ沢山のひとと出たい。・家の中で一人で考えずに他の人たちと話す機会があると良いと思った。
	同じ状況の人と出会えて安心感が生まれた	・話すことによって不安が軽くなった。・同じ状況の人たちと話が出来て安心感が生まれた。・他の人たちと話をして共感が持てた。・同じ不安と希望を抱いている人たちと交流が出来た。
	参加者と話ができて良かった	・いろんなアドバイスを参加者から得ることができた。・他の妊婦さんと話が出来たためになり良かった。・他の人の話を聞いて勉強になった。
	夫婦で頑張ろうと思った	・夫婦で一緒に子育てを頑張ろうと思った。・妻への負担を少なくしたい。
親としての育児感(自覚)の芽生え	育児への思いが高まった	・育児の心がまえに役立った。・育児への焦りが薄らいだ。・子どもについて学び実感が湧いた。
	親としての意識が芽生えた	・親としての役割や心理的なことを考えたり学んだ。・父親としての意識・自覚に芽生えた。・母親としての自覚が芽生えた。・親も成長するためにこの学級で勉強した方がよい。・学級で学んだ事も産後忘れてしまうかもしれないのでフォローしてほしい。
	美德の話はこころに響いた	・こころが豊かになり内容が心に響いた。・美德など普段考えないことを改めて考えることができた。・美德のことは大切だと感じ勉強になった。・美德の話を聞いて良かった。・美德の話は母親の自覚を改めて感じさせ精神的なことを得た。・美德の話は他の学級にないテーマだった。・言葉の大切さを実感し得るものが大きかった。・美德は子育てに大切だと思った。・美德について勉強しなくてはならないと思った。
美德を育児に取り入れることの価値観の芽生えと意見	育児・家庭での実践に結び付けたい	・美德の力を実生活に役立たせたい。・美德の話を子ども、夫に身につけて欲しい。・美德は子どもが生まれる前から使えると思った。・何事も前向きが大切だということを教えてもらった。・ほめることは良いことです。
	美德の考え方の大切さを実感した	・自分の考えが分かってきた。・自分のコミュニケーション法を振り返る機会となった。
	自分を見つめなおした	・自分を見つめなおす意味で美德は良い機会だった。・お産のことだけでなく母親としての心得、人間としての生き方までも改めて考えることができた。・胎教に良いように自分をコントロールできる余裕を持っていきたい。・自分の性格や行動を見直すきっかけになった。・自分の心のゆとりの大切さを再確認した。・もっと早くに美德の話を聞いていたら娘も病気にならないで元気に育っていたかも知れない。・努力と忍耐は心がけたい。

考察

VPの目的は、道徳的な視点を取り戻し人間的な資質の発達を支援し、潜在的にもっている思いやり、優しさ、忍耐、責任等といった美德を引き出すことである。そして、本研究の両親学級は妊娠に関する保健教育とVAを取り入れ、その効果を自尊感情と特性的自己効力感の2尺度で測定し、学級参加後の感想文で評価した。学級は参加型形式をとり、VPのSCを取り入れて、グループになって話し合いをした後に、相手の美德を発見しそれを相手に伝える(承認)という技法を取り入れた。これは、マズローが唱えた「欲求段階説」の第4番目の「承認の欲求」の理論を応用したものだが、人間には「人から尊敬され承認されたい」という深層心理的な欲求があり、これはモチベーション理論や人材開発論の中核をなす仮説理論でも使われている¹⁴⁾。研究結果から学級参加前後において、自尊感情・自己効力感の尺度得点の差は有意な差をもって上昇した。また、学級参加後の感想文を質的記述的に分析した結果、4つのカテゴリーとして、【親への自覚の芽生え】【美德を育児に取り入れることの価値観の芽生え】【人との交流の喜び】【有意義な時間の享受】が抽出された。

現代社会では、「子どもは可愛いが子どもといるとイライラする」、「子どもにどのように接したらいいのかわからない」という母親が増加してきている¹⁵⁻¹⁶⁾。子どもは親からの愛情が必要であり、それは人格形成や愛着形成に重要な要素である。では慈しみ愛するということがどういうことなのだろうか。著名な社会心理学者、Erich Frommの著書に“Art of loving”¹⁷⁾がある。その著書の冒頭に、「愛は技術であろうか。技術であれば、愛するには知識と努力とが必要になる。もしも愛がただの感情に過ぎないものであったなら互いに永久に愛するという約束の基礎はないだろう。愛は活動であり人間の力の実践である」と記されている。即ち、「愛するということが技術を習得するように自己を鍛錬し、その技術が熟練できるように努力することである。そして、愛するということが、何の保証もないのに与え、行動を起こし育むことであり、愛を引き出しうるのは愛のみであり、その学習に必要なものは精神統一、鍛錬、忍耐、関心である」と述べている¹⁸⁾。つまり、愛するということが精神統一、忍耐等の美德の実践である。

現代社会の家庭においては子どもをありのままの

姿で丸ごと受け止める心のゆとりを失いがちになってきている¹⁹⁾。これはFrommがいう、「愛する」ことの欠如といえるのではないだろうか。そして、これまでに多様な子育て支援がなされているが、育児困難や虐待が増加する一方であるという事実から、視点を人間が本来持ち合わせている美德を引き出すような支援の方向性を導入する必要があると考えられる。これまでの研究結果によると不適切な養育態度を継続して受けることにより乳幼児期の愛着が歪み、それが認知の仕方に影響を及ぼし、それが次世代へと受け継がれていくと考えられている²⁰⁻²²⁾。そして、親の養育態度は子どもの成長発達過程に影響し、思春期保健の問題、例えば心身症、引きこもり、暴力などは乳幼児期の発達における体験の質に影響を受けていることが明らかになってきた²³⁾。すなわち、次世代へよきものを連鎖させるにはなるべく早期に支援をする必要がある。本研究の結果では、美德を引き出すようなアプローチ(SC)の学級に参加することにより、美德の考え方の大切さを実感し、それは心に響き、また育児・家庭での実践に結び付けたいというという新しい価値観が芽生えていた。また、その機会が自分を見つめなおす機会ともなっていた。美德の実践方法を子育ての中に取り入れることは、親が子どもの躰の場面においても効果がある。例えば、美德の実践方法により母親が状況を冷静に忍耐強く理解し柔軟性と寛容に対応し、最終的には「ゆるす」行動と同時に、子どもの行動が道徳的なものに修正されるならば親の育児行動として理想的である。忍耐、理解、誠実さ、柔軟性、寛容等といった態度は人間が本来持っている潜在的な力である。子育ての中で美德を実践するという支援の方向性は、今までの認知の仕方や行動に変化を期待することができ、人間関係にも改善をもたらすことができると考えられる。これらのことから、新たな支援の方向性としてVAを取り入れた子育て支援は考慮する価値は十分にあると考えられる。すなわち、美德を実践する支援の方向性は具体的に愛することの実践方法を伝えることに繋がるのではないだろうか。

結論

妊娠中から美德を引き出すアプローチをワークショップ等の形式で実施することは、自尊感情・特性的自己効力感を高めるとともに、親になる意識を

深め、愛する力を引き出す子育て支援として価値がある。

参考引用文献

- 1) 厚生労働省：「健やか親子 21」公式ページ - 母子保健・医療情報データベース，
<http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/abstract.html>,2013/12/9.
- 2) 厚生労働省：児童相談所における児童虐待相談対応件数等 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv16/>,2013/12/9.
- 3) 中谷奈美子，中谷素之：母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響，発達心理研究，17(2)，148-158,2006.
- 4) 佐藤奈緒子，森岡由起子：産後うつ状態に影響を及ぼす背景因子についての縦断的研究，母親自身の被養育体験—内的ワーキングモデル及び児への愛着との関連—，母性衛生，47(2)，320-329,2006.
- 5) 浦山晶美，金川克子：母親の身近な人間関係におけるストレス感と不適切な養育態度の関連性について，石川看護雑誌，6,11-17,2001.
- 6) 川崎佳代子：育児感情・育児行動の実態及び関連する要因，母性衛生，41(1)，158-169,2000.
- 7) 渡辺久子：母子臨床と世代間伝達，東京，金剛出版，2001.
- 8) 清水嘉子：育児ストレスの実態研究（ストレス情動反応を中心として），母性衛生，44(4)，372-378,2003.
- 9) Linda KP, 大内博翻訳：『52の美德』教育プログラム（第1版），太陽出版，東京，2005.
- 10) Popov L K, Popov D, Kavelin J：The family virtues guide: Simple Ways to Bring Out the Best in Our Children and Ourselves (1st ed)，Wellspring International Educational Foundation, pp1-31, Penguin Books USA,1997.
- 11) Linda Kavelin Popov., 大内博翻訳：ヴァーチャーズ・カード—52の美德のエッセンス—，太陽出版，東京，2005.
- 12) 堀洋道監修・山本真理編：心理測定尺度集1サイエンス社，29-31, 2001.
- 13) 堀洋道監修・山本真理編：心理測定尺度集1サイエンス社，37-42, 2001.
- 14) A.H. マズロー著，小口忠彦翻訳：人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ，産業能率大学出版部，東京，2000.
- 15) 村上京子，飯野英親，他：乳幼児をもつ母親のストレスに関する要因分析，小児保健研究，64(3)，425-431, 2005.
- 16) 園部真美，白川園子，他：母親の社会的ネットワークと母子相互作用，育児ストレスに関する研究，小児保健研究，65, 405-414, 2006.
- 17) Erich Fromm: Art of Loving (1st ed)，Harper Collins Publishers New York, 1956.
- 18) エーリッヒ・フロム，懸田克躬翻訳：愛すること（第2版），紀伊国屋書店，東京，1975.
- 19) 中谷謹子，岩井宣子，他：児童虐待と現代の家族（第1版），信山社，東京，2003.
- 20) 久保田まり：アタッチメントの研究—内的ワーキングモデルの形成と発達，東京川島書店，1997.
- 21) Zeanah CH, Scheeringa M：Reactive attachment disorder in maltreatment toddlers. Child abuse & Neglect 28, 877-888, 2004.
- 22) 大西美代子，長沼佐代子，他：身体的虐待と思春期の精神病理，精神科治療，18,1189-1196, 2003.
- 23) 厚生労働省：「健やか親子 21」中間評価報告書，推進検討会。
<http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/mokuhyou1.html>,2013/12/9.

Abstract

The quality of parenting can easily influence the next generation, therefore provision of psychological support is important during pregnancy. The anxiety and stress experienced by the mother-to-be can potentially increase the risk of child abuse later which is why parenting support is included in various initiatives included into the 'healthy parent-child 21 policy. Nevertheless, the number of abuse cases has been increasing every year. Therefore, this study, is supporting the child-rearing assistance efforts focusing on the provision of psychological support through enhancing the organization of parent's class by introducing the practice of virtues based on the Virtues project. The effects of the learning how to practice the virtues during the parents class was measured using the self-esteem scale, the generalized self-efficacy scale based on the feedback from the participants. The results showed that the generalized self-efficacy and self-esteem scale scores were significantly higher after attending the class. Also, 4 categories and 17 subcategories were extracted from the data using qualitative descriptive analysis. This revealed the effectiveness of virtue approach as, the virtue words resonated in the attendance's hearts and they recognized their value and usefulness for child rearing. Also it helped the mothers to share their joy and feelings of meaningful time of actively participating in group work rather than just sitting passively during the parent's class. These results of this study showed the characteristics that helped enhance self-efficacy and self-esteem. This further suggests that the virtues approach helps to deepen the consciousness about becoming parents, and therein lies the relevance and usefulness of this approach to assist in child-rearing.

Key words: parents class, self-esteem, generalized self-efficacy, virtues